

手話言語学：言語における類像性

市田 泰弘 (国立障害者リハビリテーションセンター学院)

手話言語は世界中のろう者コミュニティで話されている自然言語である。日本手話は数ある手話言語のひとつであり、日本のろう者コミュニティの言語である。本稿では、手話言語を母語とするろう者コミュニティの特徴、手話言語とその地域で話される音声言語との複雑な関係について述べた上で、日本手話の語彙体系と文法体系について、類像性との関連を中心にそのアウトラインを紹介した。語彙体系については、類像性を利用し句レベルの構造をもつCL構文からの語彙化“フリーズング”のプロセス、フローズン語彙における音韻構造の存在、日本手話の語彙体系におけるCL構文の地位およびその一貫性と精緻さについて述べた。文法体系については、日本手話の文法体系の重要な側面として、(1)非手指マーカー(頭の動き、あごの位置、眉の位置)を理解して初めて明らかになる語順の厳密な規則と複文構造の存在について、(2)指示物を身体前の空間に位置づけることによる動詞の一致に関する現象の実像と、逆行-順行ヴォイスによる分析について、(3)思考引用を含む統語的な鑄型としての構文の存在と、その具体例としての mirative 構文と confirmative 構文の共通性と相違について述べた。(pp. 3-32)

言語の起源：生物学的シナリオ

岡ノ谷 一夫 (理化学研究所 脳科学総合研究センター)

言語はヒトにのみ特有な行動である。しかし、言語の起源を生物学的に解明するには、「言語を構成する下位機能は、動物とヒトで共通な神経解剖学的基盤にもとづく」と仮定する必要がある。すなわち言語に先立ち言語を可能にする下位機能が独立に進化していたと考える。これを「言語起源の前適応説」と言う。この稿では、3つの前適応、すなわち、発声可塑性、音列分節化、状況分節化のそれぞれについて考察する。動物実験から得られた知見にもとづき、これらの機能の進化的獲得過程と神経科学的基盤を検討してゆく。得られた結果を総合して、「言語に先立ち歌が生まれ、歌の一部と状況の一部が対応を持つことで単語と文法が同時に創発し、言語が始まった」とする考え方を音列と状況の相互分節化仮説として提案する。(pp. 35-46)

日本語非対格文における音形の変化を伴わない名詞句移動に関する文解析研究

小町 将之 (静岡大学)

大津 由紀雄 (慶應義塾大学)

桃生 朋子 (慶應義塾大学)

本論文では、日本語非対格文の構造について論じる。非対格性仮説 (Perlmutter, 1978; Burzio, 1986)によれば、非対格動詞の主語は目的語位置から主語位置への名詞句移動に従う。しかし、日本語の基本語順では主語も目的語も動詞に先行しているため、動詞との相対的な語順関係の変化で移動を判断することができない。このため、日本語非対格文の主語名詞句がこのような移動に従うかについては議論がわかれている (Miyagawa, 1989; Yatsushiro, 1999)。

この問題に対して文処理の観点から新たな証拠に基づく議論を提示するため、本研究では非対格文と非能格文の読み時間を計測するオンライン実験を行った。その結果、動詞以外の読み時間には有意差がないにもかかわらず、動詞の読み時間については非能格動詞よりも非対格動詞ほうが有意に長いことが観察され、非対格文において空所補充効果 (Gibson, 1998)があることが示唆された。この結果に基づき、日本語においても、非対格文の主語が目的語位置から主語位置へ移動していることを論じる。 (pp. 51-60)

日本語文の音読と黙読に及ぼす早口言葉の影響：一試験的研究

松永 幸子 (カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校)

ティモシー・J・ヴァンス (アリゾナ大学)

本稿は、日本人が日本語文を音読、黙読する際、早口言葉 (TT) が読む速度に影響するか否かを試験的に研究した二つの実験結果を報告するものである。実験1では、80のTT文と40の普通文 (120) に漢字の間違いを含めたものと含めないもの、及び25のフィラー文を20名の被験者に黙読してもらい、読む速度 (RT) と文の正当性の判断の不正解率を記録した。データ分析の結果、調音点に関わらず早口言葉が強く影響し、特に両唇摩擦音のTT文が読むのに長くかかった。実験2では、同じ120の文で漢字の間違いを含まないものを、16名の被験者に音読してもらい、RTと文の読み間違いを記録した。データ分析の結果、歯茎摩擦音のTT文においてのみ、読み間違いが多く、読む速度も普通文より遅かった上、歯茎の調音点においてのみ、摩擦

音の TT 文の方が、閉鎖音の TT 文より読むのに長くかかった。本研究結果は、早口言葉の先行研究結果を確認したことになり、黙読における文の理解には、日本語でも音韻処理が必要であることを示唆していると思われる。又、黙読中両唇摩擦音が特に難しかったという結果は、音韻処理に調音位置と調音方法が反映されている可能性を示すものであると考えられる。しかしながら、この可能性は、音読中歯茎摩擦音だけが難しかった理由と共に今後の研究によって明らかにされる必要がある。(pp. 61-73)

親子会話における明確化要求への応答の日英語比較研究

窪田 美穂子(東北福祉大学)

2才後半～4才後半の子供と親との間での発話内容全体の聞き返し(非特定明確化要求 Non-Specific Clarification Request 例:「え?」「何て言ったの?」)への応答を英語と日本語とで比較した。英語獲得児は発話再生(元発話の繰り返し)を求める NSCR の基本的機能に従い応答する傾向にあるが、日本語獲得児は繰り返しの他に NSCR を相づちの様に文脈の関連情報を追加し話し続けてよい合図とみる傾向にあり、応答方法は言語ではなく NSCR の機能の解釈において異なった。また日英語とも子供が NSCR を聞き文法的誤用を訂正する率は非常に低く、親も NSCR を文法よりも意味の確認をするために発する傾向にあった。親の応答傾向も言語でなく個人で異なり、英語では繰り返し型と文脈に沿った修正型に分かれたが日本語では後者のみであった。また両言語の親の文脈上修正は、会話中断の原因を子供の視点に立って推測したことによる問題解決方法を反映していた。(pp. 77-92)

コミュニケーション場面における幼児の誤信念理解

佐藤 賢輔(東京大学大学院教育学研究科/日本学術振興会特別研究員)

幼児は自然な相互作用場面におかれたとき、標準的な心の理論課題の結果が示唆する水準よりも優れたマインドリーディング能力を発揮する可能性があることを幾つかの先行研究が報告している。その仮説を検証するため、本研究では、幼児における他者の誤信念の理解に関して、コミュニケーション場面と標準的な心の理論課題の状況をより直接的な方法で比較する実験を行った。実験では、3つの年齢群に分けられた幼児(年少 3;7-4;6, 年中 4;7-5;6, 年長 5;7-6;6)に、標準的な誤信念課題、およびそれと同一のストーリー構造

を持つコミュニケーション場面を利用した誤信念課題を課した。その結果、コミュニケーション型の誤信念課題の正答率は標準型よりも全般的に低かった一方で、コミュニケーション型課題では、幼児の自身の選択に対する戸惑いを示唆する行動が非常に多くみられた。このことから、コミュニケーション場面において幼児が、自他の知識状態が異なるということにより敏感であるということが示唆された。戸惑い行動を考慮した分析の結果、コミュニケーション場面において他者の知識状態により敏感であるという傾向が、年少の幼児のみにおいて認められた。さらに、幼児にとって他者の発話の字義通りの意味を抑制することが困難であることも示された。(pp. 93-108)

年少英語学習者における自己評価の効果

バトラー後藤 裕子 (ペンシルバニア大学)

本稿は、英語を外国語として学ぶ254名の小学生の間で行った自己評価の効果を検証するプロジェクトの報告の一部である。この研究では、韓国の小学6年生に、英語の授業中、自己評価を定期的に1学期間ほど行ってもらった。もとのプロジェクトでは、量的・質的の両方の分析が行われたが、本稿では量的分析の結果だけを報告する。児童たちは、一学期の間に、自己評価をする能力を向上させていたことがわかった。統計的には、効果度(effect sizes)は小さかったものの、自己評価を行うことで、英語力自体の向上や、自信度の高まりを示す効果も多少みられた。(pp. 111-126)

中国語母語話者による日本語アスペクト「ている」の習得： 横断的研究

簡 卉雯 (東北大学)

中村 渉 (東北大学)

本稿は中国語母語話者の作文に焦点を当て、日本語アスペクト形式の1つ「ている」の習得を考察するものである。調査の結果、「動作の持続」の意味は「結果の状態」の意味より早く習得されることが明らかになった。この結果は「アスペクト仮説」(Andersen & Shirai, 1994)と一致している。また、到達動詞と状態動詞に「た」を使用すべき箇所に「ている」を使い、到達動詞に「ている」を使用すべき箇所に「た」を使用する傾向が観察された。(pp. 127-142)

英文ライティングにおける産出単位：流暢さに基づいた 英語母語話者と日本人英語学習者の産出過程の分析

松野 和子 (三重大学)
 村尾 玲美 (名古屋大学)
 森田 光宏 (山形大学)
 阪上 辰也 (名古屋大学)
 杉浦 正利 (名古屋大学)

本研究の目的は、流暢さの観点から、英語母語話者と日本人英語学習者の英文ライティングにおける産出過程を比較することである。どのような産出単位によって英文が作り上げられていくかを明らかにするため、本研究は、流暢に産出された単位(F-units)を分析した。本研究では産出過程を記録するため、実験参加者がキーボード上の一文字をタイプしたり削除することに、そのキーボード操作と操作が行われた時間を逐次的にミリ秒単位で記録するシステムを構築した。F-unitsを抽出する際には、すべての実験参加者に一律のポーズ時間を設定するのではなく、本システムによって記録されたそれぞれの実験参加者の産出速度に基づいて、個人ごとに相対的にポーズ時間を算出し、ポーズが使用されず連続して流暢に産出された言語表現を抽出した。F-unitsを分析した結果、(1)英語母語話者も日本人英語学習者も主に句単位で英文を産出していること、しかしながら、(2)英語母語話者に比べ、日本人英語学習者では句・節・文いずれのレベルにおいても流暢に産出された単位の産出量が少なく、かつ、単位を構成している単語数が少ないこと、(3)複雑な構造の句を産出する際、どのような構造かによって英語母語話者では流暢さに違いがみられるが、日本人英語学習者は複雑な句を流暢に産出していないことが分かった。(pp. 143-159)

リーディングの授業準備における意識的語彙学習の効果について

鈴木 眞奈美 (法政大学)

本研究は、英語のリーディング授業のための準備学習が語彙学習に与える影響について調査したものである。具体的には、46人の日本人の大学生を対象に、学生が使用した学習ストラテジーと、授業の最初に実施している課題図書に関する単語のテストの関係について調べた。なお、本研究のデータは学期の7回目の授業で収集した。調査の結果、学生が単語テストのためにどのように学習したかについて記載したレポート(事後的報告)の長さ(文

字数)と各学生が用いた学習ストラテジーの総数は、単語テストの結果と正の相関関係があった。また重回帰分析により、「辞書の使用」と「単語を書き留めること」の2つのストラテジーが本研究の語彙テストには効果的であるという結果が得られた。(pp. 161-174)

非移動と上代語の係り結びについて

ヤニック・ローナ (オックスフォード大学)

本研究は古代日本語における係結びのすべての用例の総括的な調査に基づいて、係り結びには、Watanabe (2002, 2005)において提案されているような、係助詞によってマークされている句の TP 位置からの移動は関与していないと主張する。

本研究では、Watanabe の分析に対する反証を二段階にわたって行う。まず、Watanabe が古代日本語の「は」と「が」は主格標示のマーカであり、主格標示された主語は [Spec, TP] 位置にあることを根本的に前提としているが、これは正しいとはいえない。むしろ属格標示された主語が [Spec, VP] に check in されているといえる。次に、wh-agreement を用いた係り結びの分析に対して問題を呈すると思われる、古代日本語の係り結びの用例をいくつか提示する。筆者はこれらの事実が、wh-句と focus phrase が本来の位置に留まっており、古代日本語において係り結びは実質的な一致 (agreement) の関係になかった状況を示唆しているのではないかと提案する。この提案は古代日本語における係り結びの経験的な観察と矛盾しないだけでなく、その歴史的な起源とも整合性があると考えられる。(pp. 177-188)